

海外学生派遣事業 実績報告書

所属 : 複合科学研究科 統計科学専攻
氏名 : 本橋 永至
海外派遣先国 : アメリカ合衆国
海外派遣先大学 : カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA)
海外派遣先大学所属 : アンダーソン・スクール (経営大学院)
海外派遣期間 : 2010年9月19日~2010年11月26日
報告年月日 : 2010年12月10日

1 海外派遣先大学について

私は2010年9月末から約2ヶ月間、UCLAのビジネス・スクールであるアンダーソン・スクールで研究を行いました。総研大では統計科学専攻に在籍しておりますが、私の研究領域がマーケティングであるため、マーケティング研究者の集まるビジネス・スクールを派遣先として選びました。ビジネス・スクールと言うと修士課程のMBAを思い浮かべる人が多いと思いますが、米国でマーケティングのようなビジネスの研究者を目指す人は、通常ビジネス・スクールの中でもMBAとは異なる研究者養成向けの博士課程に入学します。アンダーソン・スクールには、私の研究テーマであるマーケティングにおけるベイジアン・モデリングと時系列解析の世界トップレベルの研究者が所属しているためUCLAを選びました。



2 海外派遣の準備と意義

受入先の先生とは面識がなかったため、最初は知り合いの日本の大学の先生を通してコンタクトを取りました。その後、Eメールで留学の目的等について数回やり取りをした後、早く留学の申し出を快諾して頂きました。大学の事務的な手続きについては、授業の履修の有無に関わらず Visiting PhD Student として登録する必要がありました。それに伴い J-1 ビザを取得する必要がありましたが、ビザに関しては何の問題もなくスムーズに取得することができました。

今回の留学は私が総研大に入学してからちょうど1年後に当たり、入学後1年間の研究成果をまとめ、学位論文の完成に向けての指針と今後の研究者としての方向性を模索する上で非常に重要な機会となりました。また、私が現在所属している統計科学専攻の基盤機関である統計数理研究所はいろいろな意味で研究環境に恵まれていると思いますが、いつもとは違う環境で研究することにより頭の中を整理し、新たな気持ちで博士課程後半の研究を再開するという意味でも良い機会になりました。私のような統計科学に関わる研究者が質の良い研究をしていくためには、手法と応用の研究者とバランス良くコミュニケーションを取っていくことが必要であると考えます。今回の留学では、その応用の分野で今世界で最も活躍されている研究者と意見を交わすことができ、とても貴重な経験となりました。

3 海外派遣中の研究

私は昨年、UCLA から車で1時間程離れた所にあるカリフォルニア大学アーバイン校（UCI）で修士号（統計学）を取得したため、UCLA 周辺の地理については事前に把握しており到着後すぐに研究に集中することができました。また、語学に関してもまだまだ改善していきたい点が多いですが、大きな問題はありませんでした。

派遣期間中は授業は一つも履修せず、自分の研究を進めることに集中しました。受入先の先生以外にも何名かの先生と私の研究について議論する機会を作りましたが、いずれの先生も快く面談の時間を作って頂き貴重なアドバイスを頂くことができました。具体的には、この1年間の研究成果を論文としてまとめる上で修正すべき点や今後の方向性などを指摘して頂きました。自分と同じ研究の興味を持っている博士課程の学生と彼らが履修した授業や現在進めている研究について議論することも度々あり大変勉強になりました。米国のビジネスや統計学の博士課程では、最初の約2年間はほとんど自分の研究を行わずコースワークに集中します。その間は毎週膨大な宿題をこなし、定期的に行われる試験に合格しないと退学しなければならないので、かなりの知識が蓄積されます。また、派遣期間中はちょうどジョブ・マーケット・シーズンでしたので UCLA に就職を希望する大学院生が毎週一人ずつ UCLA に訪れ、採用プロセスの一環として博士課程での研究成果を発表していました。先生方からは厳しい指摘が相次ぎ、米国で研究者として成功していくための厳しさを実感しました。



4 研究以外の活動

研究以外の活動としては、私は10年以上柔道を続けているため、週に1回町の道場で柔道の指導と稽古をしました。その道場にはUCIに在籍していた時から通っていたので、久しぶりの再会となる友人も多くおり、柔道をしている時は研究のことを忘れ楽しいひと時を過ごしました。研究者同士の集まりだとしても話が研究のことばかりになりがちですが、そこでの友人とは週末に食事に行ったり、メジャー・リーグの試合を観戦するなど良い気分転換をすることができました。また、道場の先生は大学時代、柔道の日本代表チームのメンバーに選出されたことのある大変実績のある先生ですが、そのような先生が海外で柔道の指導をすることは非常に珍しく、柔道を通して外から日本を見たときの問題点などを教えて頂き勉強になりました。

今回の留学は滞在期間が短かったということもあり、派遣期間中は旅行や観光地的な所には一切行きませんでした。ロサンゼルス周辺にはユニバーサル・スタジオ、ハリウッド、サンタモニカなど有名な観光地が多数あり大変魅力的な地域だと思います。また、私はUCLAから車で20分くらい離れたトーレンスという町に滞在していましたが、トーレンスは日本からの移住者が多く住んでいる町として知られています。そのため、日本人向けのスーパー・マーケットやレストランが数多く存在し、日本人にとっては非常に住みやすい町です。米国に移住した日本人が現地でのどのような生活を送っているかということも知ることができました。さらに、マーケティング研究者としてアメリカのマーケティングの実情を把握することも重要な研究活動の一つですので、日常の買い物をしている時にも様々な発見がありました。



5 海外派遣を希望する後輩へのアドバイス

日本人にとって海外で研究することの最大の障壁は語学の問題だと思います。しかしながら、中国や韓国など英語を母国語としない他のアジアの各国から、現在多くの留学生が米国で研究するために渡米しています。日本人は完璧な英語を求めたり、欧米の英語のみが正しい英語だと思っている人が多いように見えますが、実際米国で研究してみると米国の英語は米国出身者のみが使用している英語ということを実感します。米国で研究する以上、米国の英語の基本的な文法や発音を習得することは必要ですが、それ以上に英語は世界の共通語であり、研究成果を積極的に世界に発信し、世界で評価されるべきという認識を一人でも多くの日本人研究者が持つことが日本の研究レベルを向上するために重要だと考えます。

海外で研究をしていると、語学の問題以外にも文化の違いなど日本では直面しない問題に度々直面します。しかしながら、そのような問題を一つ一つ解決しながら、今まで自分が生きてきた環境とは全く異なる環境で生きてきた人間と共通の目標に向かって一緒に努力している時、日本で研究している時にはなかなか得ることのできない喜びを感じます。海外で研究する最大の目的は世界レベルの研究を目指すことだと思いますが、それを通して得るものは想像以上に大きいと思います。

現在、日本ではアジアの近隣諸国との外交問題がメディアで大きく取り上げられておりますが、実際に海外でそれらの国の人々と話してみるといかにメディアで報道されていることが偏っている情報であるかを実感します。特に日本と中国の関係についてはネガティブな情報ばかり耳にしますが、私が米国に再訪したことを喜んでくれた友人の多くは中国人でした。研究者は比較的容易に、かつ自由に海外に行くことができる立場にいますので、単に研究だけのために海外に行くのではなく、外国人と積極的に交流することにより、世界が一つになっていくための役割も担うべきだと思っております。